

歴史学的視点を取り入れた授業の実践

—「明治時代の大名と築城」を通して—

片山 和政

(京都教育大学附属京都小中学校)

Practicing classes that incorporate a historical perspective

—Through “the Japanese feudal lords and castle building in the Meiji Era” —

Kazumasa KATAYAMA

2024年9月4日受理

抄録：本研究は、「歴史的な見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることを目的として、答えのない難しい課題に対する生徒たちの意欲を引き出すという結果が得られた。中学校歴史的分野から高等学校「歴史総合」への接続という観点から、歴史学的視点を取り入れた問いを立てるという手法を取り入れて研究を行った。本研究では、通説に疑問を持つというプロセスを経て、園部城の築城許可を誰が出したのかを推測するという実践を行った。一般には教科書に登場するような人物に目が向きがちではあるが、時の権力者がだれで、中心となった人物から推測するといった形にとらわれない探究が、生徒たちの推察力を駆り立てる姿が確認されるなど様々な成果を得ることができた。

キーワード：歴史学的視点による問い、教科書や通説にとらわれない、園部城の築城許可

I. はじめに

「明治の大名と築城」を考えさせることは、「歴史的な見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることを目的として、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』にある、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める際の指導上の配慮事項に、深い学びの鍵として「歴史的な見方・考え方」を働かせることが重要になることや「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という物事を捉える視点や考え方につながると考える。

京都教育大学附属京都小中学校では、カリキュラム編成の発展期にさしかかろうとしており、中等部6・7年～高等部8・9年を通して、中学校で使用する歴史的分野の教科書を扱うことに取り組んでいる。従来の小学校・中学校の歴史の授業で重複する内容を一元化することに取り組み、さらに歴史的事象の歴史的な見方・考え方が深まり、深く歴史を掘り下げる授業を行うことができると考える。

本単元「明治時代の大名と築城」において、一つは、教科書ではあまりふれられることのない、幕末から明治時代に生きた大名（徳川慶喜・徳川昭武・松平容保・上杉茂憲・安藤信正・鍋島直大・加納久宜・井伊直憲）に焦点をあて、どのような人物だったかを調べさせる。第一次では、これらの大名をインターネットで調べ、どのような人物であったかをロイロノートのクラゲチャートを使って発表させた。これは、6年生の歴史入門等で、人物に焦点をあてた授業を展開してきたことの延長にあり、教科書にはあまり登場しない人物を調べることで、歴史に対する新たな興味をもたせることができると考える。

もう一つは、園部城（京都府南丹市）が城郭として構えることができたのは、明治時代になってからのことであり、なぜ築城が許されたのかについて、生徒たちがどこまでせまれるかを授業で実践した。

園部城（京都府南丹市）が、なぜ明治時代になってから築城が許されたのかについては、通説では、「帝都御守衛」のためであるとか、慶応三年十二月には、新政府軍と幕府軍が砲火を交えることとなった場合、明治天皇を山陰道より安芸・豊後方面に遷し、同時に諸国に檄を飛ばして勤王の軍を募るという計画が立てられており、その明治天皇の臨時の行在所として大改築が加えられたとされる。

しかし、戊辰戦争の鳥羽・伏見の戦いが、慶応四年（1868）一月三日に始まり、装備と士気に勝る新政府軍が幕府軍を1日で退却させ、六日に戦いが終了し、徳川慶喜は海路、江戸へ逃れたとされる。その後は、新政府軍が圧倒的優位で、戊辰戦争の終焉を迎えることになる。園部城は、鳥羽・伏見の戦い後の一月十八日に園部陣屋を城郭化するために改築が開始されたとする。（一月二八日には、村方に対して、築城が認められたと廻状を出している。完成は明治二年（1869）八月。）

そもそも園部城は、元和五年（1619）～七年にかけて創築されていたが、幕府から正式な城を築くことが認められず、「陣屋」という扱いだった。その後も、城郭化の申請はされていたが認められていなかった。

それゆえ、園部藩にとって、「園部城の城郭化」は悲願だったとはいえ、政府軍が圧倒的優位で戊辰戦争を進める中で、時流に逆らって園部城の築城が開始されたことに、違和感を覚える。『小出英尚家記』には、園部城の築城を願い出た際の文書が書かれているが、ただ正月とあるのみで、時期と誰が許可を出したのかは不明である。

そこで、園部城築城の許可を誰が出したのかを予測し、ロイロノートのクラゲチャートを用いることで、論理立てて発表することができ、教科書や通説にとらわれない歴史像の構築ができる教材である。そして、歴史的な手法で、通説通りかどうか疑うというプロセスから、園部城が最後に築城を許された経緯にせまることで、歴史の醍醐味を感じることができるのではないかと考える。それは、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』の「歴史総合」の「生徒一人一人を生涯にわたって探究を深める未来の創り手として」育むという観点や「社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動」につながるのではないかと考える。

II. 授業実践

- 1 日時： 2023年1月中旬～2月初旬
- 2 学年： 京都教育大学附属京都小中学校 第8学年 3クラス
- 3 単元： 明治時代の大名と築城
- 4 単元の計画（全6時間）

- 第1次「明治時代を生きた大名とは」①
- 第2次「明治時代を生きた大名とは」②（クラゲチャート作成）
- 第3次「明治時代を生きた大名とは」③（発表）
- 第4次「園部城の築城は、なぜ許されたのか」①
- 第5次「園部城の築城は、なぜ許されたのか」②（クラゲチャート作成）
- 第6次「園部城の築城は、なぜ許されたのか」③（発表）

5 実践の概要

第1次では、「徳川慶喜・徳川昭武・松平容保・上杉茂憲・安藤信正・鍋島直大・加納久宜・井伊直憲」という8名の幕末から明治時代に生きた大名に焦点をあてさせた。この8名を選んだのは、国立国会図書館の電子展示会「近代日本人の肖像」などインターネットであらかじめ調べやすい人物にした。小グループ毎に、一人の大名を調べさせた。第2次でグループワークによるクラゲチャートの作成、第3次で発表という展開を行った。

第4次では、江戸幕府が定めた一国一城の政策を復習した上で、「日本の築城は、いつまで行われていたのか」を予想させ、その上で、園部城が完成した流れを確認し、「いったい園部城の築城許可を誰が出したのだろうか。」という問いを考えさせた。第5次では、自分たちが園部城の築城を

明治時代を生きた大名とは①

（本時の目標） ① 以下8名の大名を調べ、クラゲチャートを作成しよう。

② 以下8名の大名が人物だったのか、その生涯について調べてみよう。グループごとに、各々の人物を調べ、クラゲチャートにまとめてください。（ウラに補足メモ欄あり）

③ 以下の8名の大名が人物だったのか、その生涯について調べてみよう。グループごとに、各々の人物を調べ、クラゲチャートにまとめてください。（ウラに補足メモ欄あり）

④ 以下の8名の大名が人物だったのか、その生涯について調べてみよう。グループごとに、各々の人物を調べ、クラゲチャートにまとめてください。（ウラに補足メモ欄あり）

図1 「明治を生きた大名」ワークシート

許可した人物として推理した人物をクラゲチャートにまとめ、第6次で発表という展開を行った。

以上が、本単元の実践の概要である。なお、令和四年度の京都教育大学附属京都小中学校の研究協議会では、第4次の授業を実践した。

Ⅲ. 授業実践からの考察

本実践を通して得られた成果と課題は、主に以下の2つが挙げられる。

1つ目は、令和三年度の単元「古代日本と東アジアとの交流」の一側面の再検討を終了した後にとったアンケートによると、歴史の学習が「以前より深まった」と回答した生徒が9割以上、同じく、インターネットの情報に頼らず、先生が示した資料や歴史の史料から考えることについては、「以前より深まった」と回答した生徒は約40%、「興味を持つことができた」と回答した生徒は約50%であった。それが、本単元終了後のアンケートによると、インターネットの情報と、先生が示した資料に、「以前より深まった」と回答した生徒は約40.5%、「興味を持つことができた」と回答した生徒は約52.4%（有効回答数84名）だったので、大きく変わらなかったことがあげられる。そこには、歴史は「教科書に書いてあることとかをひたすら覚えるのはつまらない」と感じやすい科目であることが多いと思われる。

● 一人で考えることも大切だと思うが、グループで考えることでたくさんの意見が得られ、考えさせられることも多かったので良かったと思った。 ● 一人で考えたら出てこない意見もグループで考えることで深まったと今回感じたのでまたこのようなグループ活動をしたいと思いました。 ● 現在も答えが分かっていない謎について考える取り組みが楽しかったので、今後の授業でも取り入れてほしいです。
表1 本単元後アンケートの自由記述欄Ⅰ

しかしながら、表1に見られるように、本単元終了後のアンケートに記載された生徒の自由記述欄からは、およそ、誰もが明治時代になってから築城が許されたとは思わないことを多面的・多角的に考察し、通説にはとられない考察を評価・判断することができることにつながることができたと考ええる。

2つ目は、歴史学的な手法を取り入れた「明確な答えがない問い」に対して、生徒たちが推理し、その理由を組み立てていくことができたことにある。「園部城の築城許可を誰が出したのだろうか。」という問いに対しては、図2に示した生徒が作成したロイロノートのクラゲチャートにあるように、幕末～明治期に活躍した西郷隆盛や大久保利通などをあげるグループが見られた。これは、通常の授業では江戸幕府の滅亡を終えた段階での本単元の授業に入ったことによると考える。また、西園寺公望をあげるグループも比較的多く、これは慶応四年正月五日から、西園寺公望を鎮撫総督として派遣した、山陰道鎮撫使進路図もあわせて確認したものによると考えられる。

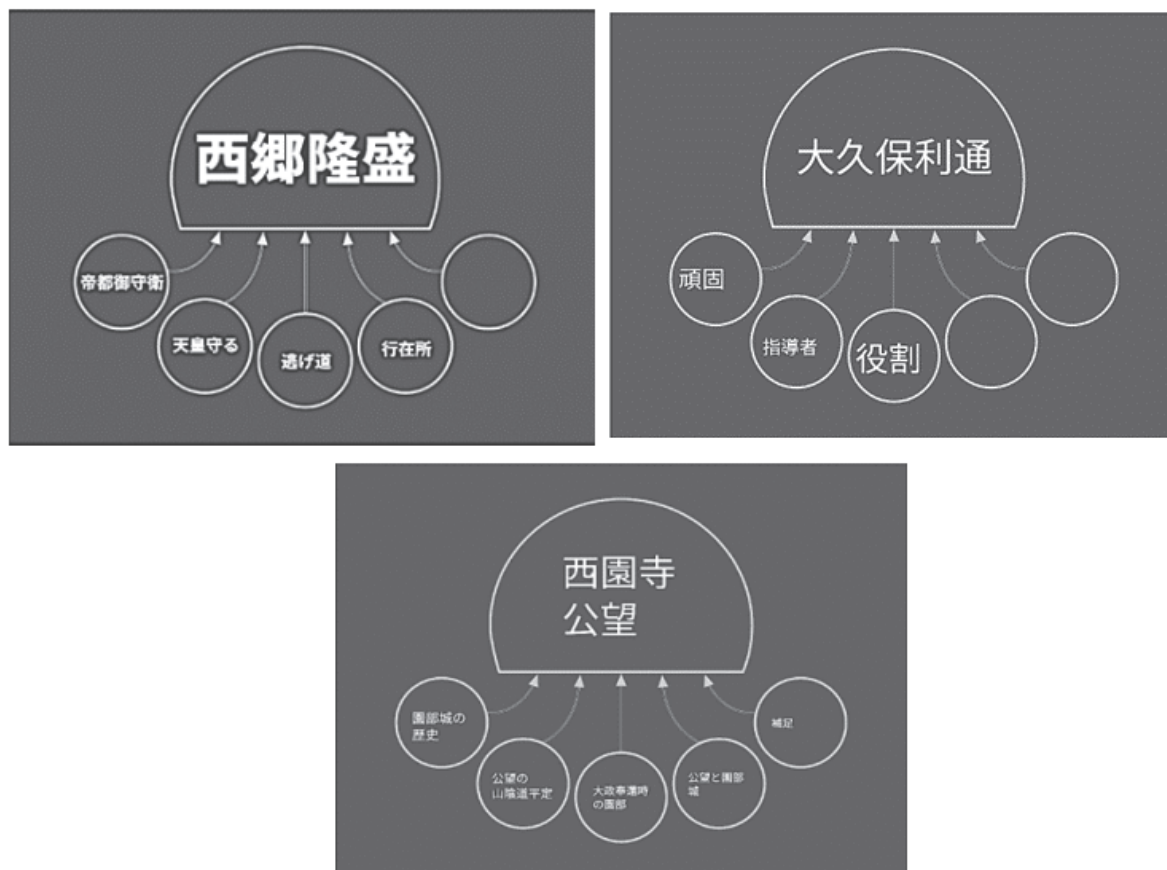


図2 園部城の築城許可を誰が出したのだろうか(クラゲチャート)①

クラスによっては、「西郷隆盛」と「西園寺公望」のみがあげられたクラスもあった。これは、「明確な答えのない問い」に対しては、一定程度予測されるものであり、許容範囲内である。しかしながら、図3に示したように第6次の授業において、各班の発表を聞いての感想にも表れているといえるが、教師側の史料提示の仕方に課題が残ったのかもしれないと感じる。

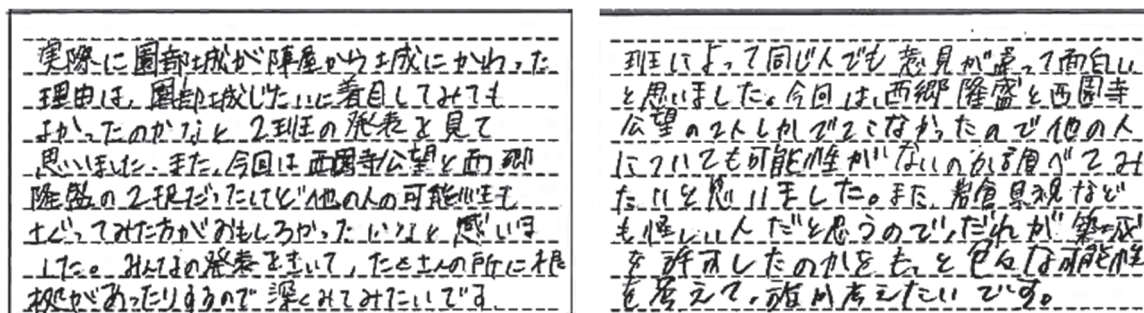


図3 第6次の授業後の感想 i

ところで、第4次の授業実践の生徒の予測したものをしていると、意外な所では図4に示したように、「明治天皇」や「三条実美」といった名前があげられたことにある。王政復古の太号令により、徳川慶喜の官職等の返還がなされ、天皇中心の政治を行おうとするものであるとか、興味を持って教科書を読み進めたなどの理由で、武士中心の江戸時代から、天皇中心の明治時代へと変わっていったことによるものではないかと考える。おもしろい意見としては、時の権力者がだれで、中心となった人物からの推測で「三条実美」をあげたグループがでたことにある。これは、形にとらわれない探究が、生徒たちの推察力を駆り立てることができたものによると考える。これは、まさしく歴史学的手法を取り入れて、予測するという展開として最も効果が得られたものと考えられる。

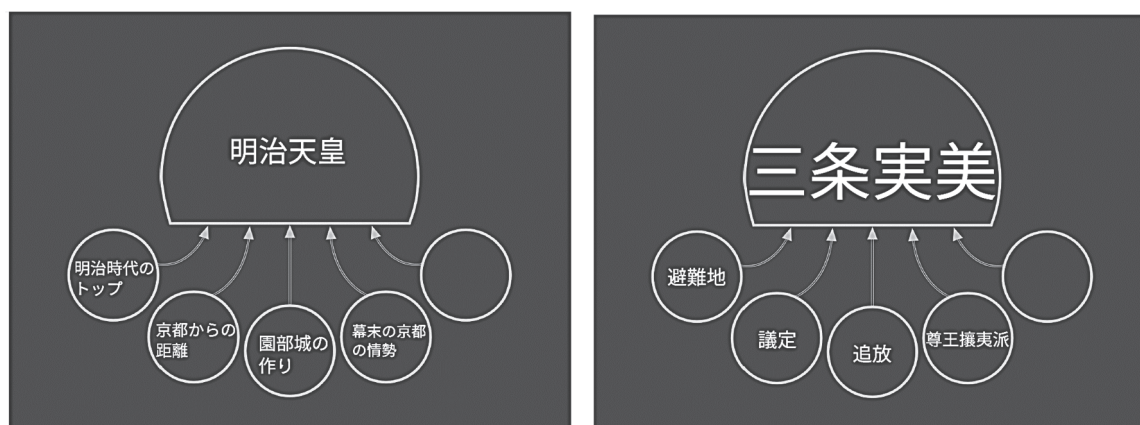


図4 園部城の築城許可を誰が出したのだろうか(クラゲチャート)②

ただ、七卿落ちを経験し、その後、太宰府に移された三条実美は、王政復古の後の慶応三年12月27日入京、即日新政府の議定の要職についたわけであるが、小御所会議の場での園部城築城許可を出したとは考えにくい。つまり、園部藩最後の藩主小出英尚が、新政府軍と幕府軍が砲火を交えることとなった場合、明治天皇を山陰道より安芸・豊後方面に遷す計画をどの場面で知ることになるのかを推理していくと、小出英尚が慶応三年12月に京都見廻役となり、朝廷に出仕していたことと、岩倉具視が王政復古のころから倒幕への動向が見られることなどから、最有力が「岩倉具視」ではないかという自説を本単元の最後に生徒へ示した。これは、生徒からの質問で、授業者自身が「誰が園部城築城の許可を出したと思っているのか」という問いに対する返答として示したものである。

さて、本単元終了後アンケート（有効回答数 84 名）では、「グループで分担して、行うことができるのは良い」と回答した生徒は 70.2%であるのに対し、「助け合いながらの学習を行えるので良い」と回答した生徒は 64.3%となった。これは、ある 1 つの課題についてグループワークを行うことによって、課題解決へ向かうことに一定程度の成果があったと感じる。

- こういったグループで話し合うことは理解が深まり面白い。
- 一人で考えることも大切だと思うが、グループで考えることでたくさんの意見が得られ、考えさせられることも多かったのが良かったと思った。
- 一人で考えたら出てこない意見もグループで考えることで深まったと今回感じたのでまたこのようなグループ活動をしたいと思いました。
- 今後も今年と同じような形(グループ活動)で学習していきたいと思いました。

表2 本単元後アンケートの自由記述欄Ⅱ

実際に、表2に示したように、グループワークにおける「視点や方法（考え方）」を用いて課題を追究したり解決したりする学び方につながり、これにより生徒の「歴史的な見方・考え方」が鍛えられていく一助となるのではないかと考える。そのようなことは、図5に示したような第6次の各班の発表を聞いての感想にも表れているといえ、表2の本単元後アンケートの自由記述欄と合わせて、効果があらわれ始めているのではないかと考える。

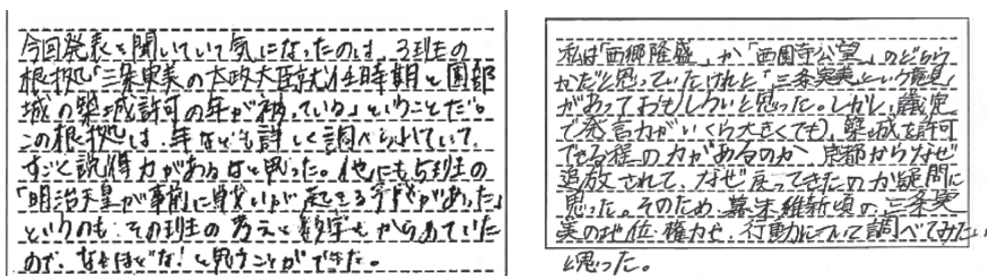


図5 第6次の授業後の感想 ii

IV. まとめ

さて、本単元の授業では歴史学的視点を用いて授業者が問いを立て、インターネットの情報も含めて、資料がある程度授業者が提示する方法で進めてきた。教科書の内容だけにとらわれず、さらに深める学習としては効果があったものとする。それは、図6に示したような本単元終了後の各班の発表を聞いてからの感想にも表れているような、答えのない難しい課題に対する生徒たちの意欲を引き出すことにはつながったのではないかと考える。

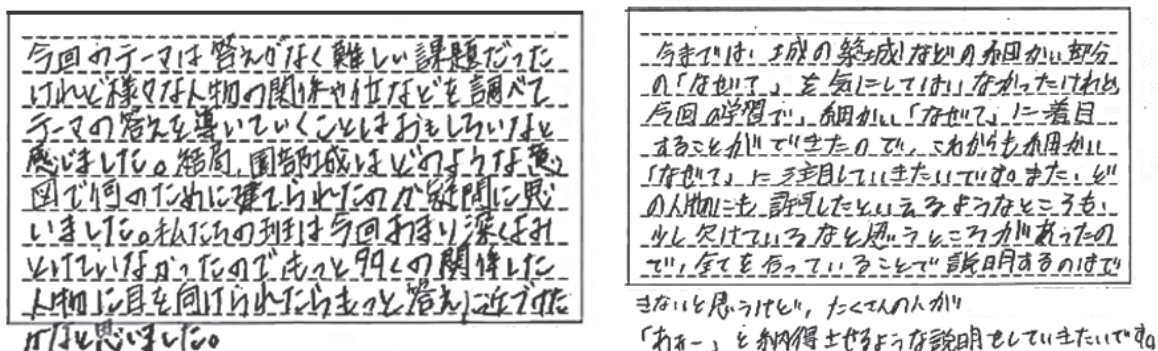


図6 本単元終了後の感想

- 日本史と世界史を絡めて、なぜそれが起きて、それがどのようなものに影響を及ぼしたのかなどを知りたくなった。
- 歴史って教科書に書いてることとかをひたすら覚えるのはつまらないけれど、一つの出来事を深掘したり考察したりするのは楽しいしおもしろいと思いました。今みたいにずっと歴史を学ぶだけじゃなくて考察したりするのを続けてほしいです。
- 園部城の築城はなぜ許されたのか、などの疑問を今度は自分で見つけ、考えを深めていきたい。
- 現在も答えが分かっていない謎について考える取り組みが楽しかったので、今後の授業でも取り入れてほしいです。
- 細かな疑問を追求するのは面白いし、今回のような答えが明白ではないことを考えるのは調査力とそれらをかきた想像力が大切だなと思いました。

表3 本単元後アンケートの自由記述欄Ⅲ

そのようなことは、表3に示したような本単元後アンケートの自由記述欄からも見て取れるといえよう。「教科書に載っていないところまで深めて、自分たちの考えを主張できて良かった」という意見が見られ、一定程度の評価ができると考える。ただ、その一方で、単元を「明治時代の大名と築城」とするのではなく、幕末から明治初期にかけての社会の情勢の変化の中の一場面とする方が良かったのではないかとというご指摘も、研究協議会後の分科会でいただいた。新たな視座として、今後に生かしたいと考える。

中学校の歴史的分野でも様々な情報をもとに調べまとめる技能を身に付けることは行われてきている。しかしながら、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編』にある「歴史総合」の「歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力」を養うことで、自己の探究につなげられているかについては、難しい側面もある。通説に疑問をもつという歴史学的な手法が、いずれ「歴史総合」から「日本史探究」および「世界史探究」への接続への一助となりうると幸いである。

【参考文献】

- 家近良樹(2014)『江戸幕府崩壊』講談社学術文庫
- 岩城卓二他編著(2022)『論点・日本史学』ミネルヴァ書房
- 小川幸司・成田龍一編(2022)『世界史の考え方』（シリーズ歴史総合を学ぶ1）岩波新書
- 亀岡市文化資料館(2018)『第63回企画展 山陰道鎮撫隊 一丹波の郷土と幕末維新一』
- 河合敦(2020)『殿様は「明治」をどう生きたのか』扶桑社文庫
- 河合敦(2021)『殿様は「明治」をどう生きたのか2』扶桑社文庫
- 木村礎・藤野保・村上直編(2015)『藩史大辞典』第5巻 近畿編【新装版】雄山閣
- 児玉幸多・北島正元監修(1977)『新編 物語藩史』新人物往来社
- 佐々木克(1977)『戊辰戦争』中公新書
- 園部町史通史編(2005)『図説 園部の歴史』園部町・園部町教育委員会
- 高田徹(2020)『絵葉書から分析する 近世城郭の建築と空間』戎光祥出版
- 中村彰彦(2000)『脱藩大名の戊辰戦争』中公新書
- 成田龍一著(2022)『歴史像を考える 「歴史叙述」と「歴史実践」』（シリーズ歴史総合を学ぶ2）岩波新書
- 南丹市教育委員会社会教育課(2017)『園部城址』
- 南丹市立文化博物館(2019)『園部藩の歴史と文化』
- 南丹市歴史探勝会発行(2019)『園部藩立藩四百年 AtoZ』
- 南丹市役所 市長公室秘書広報課(2019)『広報なんたん Vol.96』8・9月号
- 久住真也(2018)『王政復古』講談社現代文庫
- 平井聖他編(1980)『日本城郭体系』第11巻 京都・滋賀・福井 新人物往来社
- 福田忠雄(1991)「明治維新と鳥羽文書」『郷土誌 八木』第3号 八木史談会
- 藤田覚(2015)『幕末から維新へ 〈シリーズ 日本近世史 5〉』岩波新書
- 藤田覚(2013)『幕末の天皇』講談社学術文庫
- 三谷博(2017)『維新史再考』NHK ブックス
- 八木町史編集委員会編(2013)『図説 丹波八木の歴史』第四巻 近代・現代編 南丹市
- 米田藤博(2020)『小藩大名の家臣団と陣屋町（1）—近畿地方—』クレス出版 新装改訂版

